少年期

「息子が重大な校則違反ということで、学校へ行ってきます」。嫁の情けなさそうな電話の声である。驚く私に嫁は手短に事情を説明する。家出の一人の学友を孫息子が泊めたことが学校に知れたというのが問題の中身である。泊めるに当たって、当然わが孫息子は両親と相談し、両親もその少年と話し合っているし、向こうの母親にもしかるべき連絡をとりあってのことである。前夜は野宿をしているので、捨ておけない事態であったようだ。

しょげている嫁に、私は幾つか思いつく点を言って、元気づけて送り出した。

—先生とは一対一を避けて、相手を多くした方がよい。お互い感情的にならないですむ。校則は何のためにあるか、場合によっては問うのもよい。二人の少年の心を守ることだ、わが子大事の低い次元にいてはダメよ。—

予定より遅れて嫁からの元気な電話。

—先生方は九人、お父さんの言う通りでよかった。一時間も待たされたので、その

間に決心もついて、私たちがとったいきさつを一気に説明した。よく分かって頂き、玄関まで皆に見送られたぐらい。でもやはり一言いわれた。〝泊めた夜、学校へ連絡してほしかった〟と。〝私はそんなことしません〟。つい、強く返してしまったの。—

それが正しい。親でもないお前が、いや親であっても、それはしてならないことだ。連絡すれば少年の心は深く傷つくからだ。教育の名において、何と多くの少年の心が荒々しい手でかき回されていることだろう。

少年期の心の中は嵐が吹きまくっている。だれか、それをかばい、いたわり、許し、励ますものがいれば、やがて嵐は静まり、少年は再び眉をあげて青年期へと歩を進める。少年の私にとって、先生方は、いつもそういう存在であった。

（一九八六年七月二十一日）